

【日記指導で】

今年から3、4年生で日記の課題を出すようになりました。課題となった日記には子どもたちもしっかりと取り組んでいます。他の学年でも、日記はできるだけ書くように子どもたちに声をかけています。

私はときどき職員室にある子どもたちの日記を読ませてもらうことがあります。そこには、子どもたちがいろいろなことを考え、経験しながら日々の生活を送っていることが綴られています。日記は「子どもの今」を知る上でとても大切なものになっています。子どもを見る教員の視野が広がることは、保護者との情報の共有、交換がしやすくなることにもつながります。

日記指導において大切にしたいことは、継続して書くことで自分の思いを文章に表すことができるようになること、書くことの楽しさを感じるようになっていくことです。日記を通して、文字指導（誤字、脱字、既習漢字の使用など）も行っていきたいというご意見もいただきますが、上記の目標達成を第一に考え、文字指導については、子どもの実態を考慮しながら行っていくこととします。

【最近の事件事故から】

学校で起こる事件事故のニュースがときどき聞かれ、その度に考えさせられることがあります。最近発生した事例の中で、自分がいじめられていることに悩み、また他にもいじめが行われていることを知りながら自分には何もできない、何もしてあげることができないということから命を絶った事件、授業中騒いだり人の悪口を言ったりする子を許せなくて傷つけてしまった事件などがありました。それぞれ事件の原因はもちろんこれだけではないのですが、ここに共通していることもあるように思います。それは、かなり長い期間に渡ってそういう気持ちをそれぞれの心に溜め込んできているということではないでしょうか。

学校という場は、児童、生徒そして教員という限られた人間集団で構成されています。桐光学園小学校でいえば、419人の児童と30人ほどの教職員で構成されています。学校においては、教職員以外の大人の目はほとんどありませんから、そういうことから、教員が子どもたちとどのように接しているかが大切になります。教員が子どもたちの生活に深く関わり、その変化に気付かなければ、そこには子どもだけの世界が広がり、物事についての判断、善悪についての判断も子どもに委ねられてしまうことになりかねません。子ども自身が考え、判断しそして行動するという場面を多く作っていくことは大切ですが、そこには適切な教員の関わりが必要です。教員が子どもたちの声に耳を傾けること、ときには声にならないことであっても子どもの表情から察すること、それができるようにしていくことが大切です。

【中高の先生に】

子どもたちの通学路には、駅前、県道、第一グラウンドの3箇所に横断歩道があります。登校時は、駅前と県道付近では、中高の先生方が小学生にも声をかけながら見守ってくれています。歩行者用の信号が点滅し始めると、それまで止まってくれていた車を通すために、横断しようとする児童、生徒に声をかけてくれます。そんなときに、体の大きな中高生の間をすり抜けるようにして無理に道路を横断しようとする小学生もいます。「小学生は困ったものだな」と思うこともあるでしょうし、ときに、注意してくれる先生もいるでしょう。中高生をいつも相手にしている先生方の声かけが小学生にとって厳しい言い方になることがあるのも分かります。そういう声をかけられた子どもが、小学校に来て「怒られた、恐かった」と言うこともあります。子どもたちの話を聞いてみると、確かにもう少し違った声のかけ方ができなかったのかと思うこともありますが、その原因を作っているのは子どもたちなのです。その原因となることをなくしていくように努力することが大事なんだということを子どもたちに分かってもらわなければなりません。

先日高校生が小学校に電話をくれました。「電車の中でとても行儀の悪い小学生がいたのですが、注意できませんでした。〇〇線、大体〇時ごろでした。体の大きさから〇年生くらいだと思います。」そういう場面に遭遇したときに、直接声をかけてくれる人はあまりいません。注意して、その子どもが予想に反した行動を起こしたらどうしようと心配するからでしょう。そういう環境の中で、子どもたちは自分の行動に何か問題があっても、その場で振り返ることもなく、実際にはその行動について忘れたところに注意を受けることになるのです。これではなかなか改善できるものではありません。

中高の先生方が自分の学園の子どもであるからという気持ちを持って、気づいたことをその場でピシッと言ってくれることはむしろありがたいことではないでしょうか。

【保護者球技大会】

6月26日に行われた保護者球技大会には今回も多くの参加がありました。体育館では予選リーグから決勝トーナメントまで、熱戦が繰り広げられました。汗をかきながらプレーに集中する親の姿が子どもたちには忘れられないものになったことでしょう。次回の大会も皆さんの力で盛り上げていただけるとありがたいです。